



お城へ呼んだのは誰？②

「あ、扉が！」

アルの言葉にみなが振り向いた。一旦開いたと思った扉がまたゆっくりと閉じられようとしていた

「急いで入るぞ。」

ゴメスの号令で、子ども達は駆け足で扉を通りすぎ、城の中に足を踏み入れたのだった。

バタン

門は完全に閉じられた。

「とりあえず、白仮面達からはにげられたな。」

アルがほっとした顔で言った。

「でも、コーのいうとおり、ここは謎解きの場所なんだわ。これからも、色んな謎を解いていかなないと行けないのね。」

アリスが言った。

「これからも、みんなで知恵を出し合っていこうぜ。」

アルがみんなにいった。

ドン

アルはいきなり胸を押されて後ろにひっくり返った。見上げると、ゴメスが仁王立ちをしていた。

「何するんだ。」

アルはゴメスを睨んだ。

「てめえ！リーダーぶってんじゃねえっていつてるだろ。アルの分際で生意気なんだよ。」

アルは怒りを乗り越えてあきれていた。

「ゴメス、今はリーダーがどうこう言ってる時じゃないだろ。俺は、みんなで協力してがんばろうって言ってるだけさ。」

「それがえらそうだっていつてるんだよ。」

「じゃあどうしたらいいんだよ？」

「おまえはだまってろ。みんな俺についてきたらいいんだ。」

あたりがシンとなる。気まずい雰囲気回りを包んだ。

「はあ、ガキね〜〜。」

ルーがゴメスに聞こえるようにつぶやいた。ゴメスがぐっとルーを睨んだが、ルーは素知らぬ顔だ。

「はいはい、じゃあゴメス、あんたがリーダーね。わたしたちが家に帰れるように責任持ってがんばってよね。」

「お、おう。わかりゃいいんだ。」

ゴメスはルーの言葉に少し気圧されたようだったが、一応自分の意見が通ったので満足したようだった。

アルはゴメスのわがままに納得がいかなかったが、とりあえずはゴメスのしたいようにさせる

しかないと思い、口をつぐんだ。

「さて、これからどうするの？リーダーさん。」

ルーが意地悪そうにゴメスに質問した。

「そ、そうだな。とりあえず、腹がへったな。くいもんを探そう。」

「はあ。」

みんなが大きなため息をついた。

コーは改めて城の中を見渡した。

ここは大広間のような。かなりの広さがあり、中央には大きな上り階段がある。

その階段は途中からT字型に分かれており、左右にある扉に通じている。2階部分にあたるどこかの部屋に通じているのだろう。

そして一階部分には左右に2箇所ずつ扉があり、階段の裏側の奥にも扉があるようだ。内装はとても豪華だ。まず目に付くのが正面の彫像で、裸の天使が、弓を構えている。

「かわいい・・・。」

アリスはそれを見て、目をうっとりさせている。

他にも彫像や、絵画など、高価そうな美術品がたくさん展示されていた。作り物の町とちがって、この城だけは本物のようだ。

アルは城の内装を注意深く見ながら思った。

「あれ。」

ルーがつぶやいた。

「どうした？」

アルが天使像の前で首をかしげているルーに声をかけた。

「この天使像なんだけど・・・。」

「きゃああああ！」

ルーが言いかけたところで、突然のアリスが叫び声をあげた。

アルたちはいっせいにふりむいた。

見ると、ゴメスがお腹を押さえてうめいている。そばには、かじられたリンゴの果物が転がっていた。

「どうしたんだ？」

コーが聞いた。

「そこのテーブルに置いてあった果物をゴメスが食べて、・・・これを先に気づいたらよかったんだけど・・・。」

アリスがそう言って指さした先には同じテーブルの上だった。テーブルクロスに、金の刺繍がしてあった。

「これは・・・。」

コーが思わずうめいた。

そのテーブルクロスには、金の刺繍で、毒入りと書かれていたのだった。

「後で私がこれに気づいて、ゴメスに教えたんだけど、遅かったみたいで・・・。」

アリスが整った眉を悲しそうにひそめながら言った。

コーはテーブルに注目した。白い豪華なテーブルの上に金の皿がのっており、そこにフルーツが山盛りになっていた。みなみずみずしい新鮮な色をしており、思わず食べたくなるほどとてもおいしそうであった。

「刺繍の通り、何か毒がはいっていたんだ。」

コーが青い顔をしていった。

普通、テーマパークはお客の安全を一番に優先している。万一事故があると、どこかの遊園地みたいに、つぶれてしまうからだ。

「しかし、いきなり毒入りの食べ物を食べさせるなんて。」

やはりただのテーマパークじゃなさそうだ。

コーの額から冷たい汗が流れ落ちた。

「やべえよ。ゴメスが・・・。」

アルが焦った様子で言った。

ゴメスはお腹を押さえてうめいている。呼吸は荒く、だいぶ苦しそうだ。

「ん？」

コーがテーブルに何かないか見ると、金の皿の奥に、白いナプキンで覆われたなにかを見つけた。

「これはなんだろう。」

そう言いながらコーがナプキンを取り去ると、そこには

青い液体が入った細長いビンが1本、

赤い液体が入った細長いビンが1本、

何も入っていない金のビンが1本、

が並べられていた。

ビンの高さは金のビンだけが低く、あとの二つは同じ高さだった。

青い液体の入っているビンには10と書かれてある。

次に赤い液体のビンには8とかかれ、青い液体より量が少ない。

金のビンには4と書いてあり、なにも入っていなかった。

そして、白い紙が一枚置かれている。紙というより、カードといったほうがいいかもしれない。その鋭さは、触っただけで手を切りそうだった。

そこにはこう書かれていた

これは薬です。このふたつの液体を同じ量ずつ金のビンいっぱいに入れると完成です。

ただし、混ぜるのは一回だけにすること。でないと上手くまざりません。

と書いてあった。

「またクイズかよ！」

アルが叫んだ。

「謎っていいなよ。」

コーが訂正した。

「早く作らないと、ゴメスが！」

アリスは切羽つまった表情で言った。

「クスリを混ぜる？意味わかんねえ。」

アルがうめいた。みながカードの説明書きと、色のついた液体の入ったビンを見比べている。

「最初から、ひとつひとつ考えていくしかないでしょ。」

コーがみなに言い聞かせるように言った。

「つまり、空の金のビンに赤い液体と、青い液体を同じ量ずつ入れなければならないということだ。」

「ということは、金のビンには4って書いてあるから、赤い液体を2，青い液体を2ずついれればいいのね。」

コーの言葉をアリスがつかないだ。

「でも、このビン、目盛りがついてないわ。」

アリスの言うとおりに、これらのビンにはどのビンにも目盛りがついていない。これでは、液体の正確な量がわからない。

「ふむ。」

コーは難しい顔をしてそれだけ言った。

「半分ずつだいたいに入れちゃえば？」

アルが提案したが、すかさずアリスが反対した。

「そんな適当にして、ゴメスに何かあったらどうするのよ。」

「ゴメン……。」

アリスに怒られて、アルはシュンとしている。

「青い液体と赤い液体を比べてみよう。」

コーに促され、みんなは二つのビンに注目した。一つのビンには青い液体が目一杯入っている。そのビンには10という数字が書かれている。もう一つのビンには赤い液体が、青い液体より、少なめに入っている。そしてそのビンには、8という数字が書かれている。

「赤い液体の方が少ないわ。」

アリスが言った。

「青い液体の量と、赤い液体の量とを比べて、やっぱり赤い液体は、ビンに書いてあるとおり、8目盛り分の量が入っているはずだ。」

「うんうん。」

コーの言葉に、アリスがうなづく。

「青い液体と、赤い液体の量がちがうことが一つのヒントになると思う。」

「次に、この金のビンを見てみよう。」

コーは金のビンを手を取った。金のビンはずしりと重く、重厚な輝きを放っている。中には何も入っていない空だ。ビンの横には、4という数字が、赤く書かれていた。

「このビンにはなにも入っていない。もちろんクスリを作るためのビンだから、当たり前なんだけど・・・。」

コーがみんなを見回しながら言った。

「アル分かってるかい？」

コーが疑わしそうな目でアルを見た。

「え？ああ、もちろんだぜ！アハハ・・・。」

アルはやたら動揺したそぶりで言った。

（こいつ分かっていないな・・・。）

みんながそう思った。

「あれ？スーは？」

アリスの言葉に、みなは周囲に目を走らせたが、スーの姿が見えなかった。

「スー？」

呼んでも返事がない。

「おいおい、次はスーまで・・・。」

アルが焦った様子で言った。

「大丈夫だよ。どこかでまたありもしない出口を探してるんじゃない？」

コーはビンを見比べながら言った。

「今はゴメスを早く助けないとね。」

「冷たいじゃねえかよ。コー。」

アルがコーに詰め寄るように言った。

「な、なんだよ。だってしょうがないじゃないか。勝手にいなくなったんだし・・・。」

コーがうつむいて、ボソボソと言った。

「あたし、スーを探してくる。」

突然、アリスが言った。

「他のみんなはクスリをお願いね。」

そう言いながら、アリスはすでに走り出していた。

「おい、待てよ。俺も行くよ。一人じゃ危ないぜ。」

アルもアリスを追いかけていった。アルはクスリのクイズから解放されて、少しうれしそうであった。

コーはしばらく走り去っていく二人を見送っていたが、

「ふん。まあいいさ。僕がこの謎を解けばいいんだ。」

と独り言を言った。

残されてコーとルーは、しばらく無言で二つのビンを見つめていた。

ゴメスはウンウンうなって苦しんでいるが、コーはいい案が浮かんでこない。

コーはいらだっていた。

「ルー君、君の意見を聞きたいんだけど。」

と、ルーに話しかけが、

「・・・。今いいところだから、話しかけないで。」

とピシャリとはねつけられてしまった。

(フン。)

コーは心の中で思った。

(相変わらずお高く止まってるよ。どうせ全くわからないくせに。)

しかし、ルーはいきなり行動を開始したのだった。

青いビンを手に取り、金のビンに満タンに注ぎ込んだ。

「あ。」

コーが思わず声を上げた。

「全部入れてどうすんだよ！ルー。」

コーが信じられないという顔をして言った。

「青いクスリは2目盛りでいいんだぞ！なにやってんだよ。」

コーは青い液体が、こぼれそうなくらいなみなみと入った金のビンを指さしながら言った。

コーはルーが何を考えているのか分からなかった。

ルーはうすく笑って返事をした。

「こうするのよ。」

と、金のビンを逆さまにして、青い液体を床にこぼしたのだ。

「ああああああ！」

コーは口をあんぐりと開けて、ただただうめくだけだった。

青い液体は堅い石畳の上を広がっていき、石と石との細い隙間に入りこんでいった。

ルーは手を休めることなく、もう一度青い液体を金のビン一杯に注ぐと、ふたたび全てを床にこぼした。

「なにしてんだよ、ルー。」

コーは真っ青な顔をして、ルーに詰め寄った。ルーは微笑みをくずさない。

「よくみなさいよ。」

青い液体が少し残ったビンを持ってコーにみせつけた。

少しの沈黙があり、

「あ なるほどね。」

コーは全てを理解した。

「10ある青い液体から、4目盛り入る金のビンに2回捨てれば、残りは確かに2目盛りだ。」

コーが言った。

「そう。金のビンの半分2。」

ルーは得意げな笑みを作った。

「フーン、まあまあやるじゃないか。」

コーはルーのことを少し認めたようだ。

「へえ？」

ルーが以外な顔をして言った。

「コーってみんなをバカにしているとおもったけど、人をほめることがあるのね。」

コーの顔が突然赤くなる。

「まあ一番は僕だけだね。それを忘れないでくれよ。」

「はいはい。」

ルーはそれを軽くあしらう。やはり女の子のほうが一枚上手らしい。

「あとは、青い液体を金のビンに入れて、残りのところに赤い液体を入れれば完成ということね。」

ルーは残った青い液体を金のビンに入れ、そこに赤い液体を金のビンが一杯になるまで注ぎこんだ。

「よしこれで完成だ。」

ルーは金のビンの薬を、ゴメスに飲ませた。

しばらくすると、ゴメス腹の痛みは取れたらしく、元気を取り戻して立ち上がった。

「大丈夫かい？」

コーが訊ねたが、

「ふざけやがって このくされリンゴめ！」

と言っただけでゴメスは礼も言わなかった。

「ゴメス。」

コーは勇気を出してゴメスを呼んだ。

「ああ？」

ゴメスがコーに向き直ってにらみつける。コーは一瞬ひるんだが、ゴメスを睨み付けて言った。

「リーダーをやりたいんだったらもっと慎重に行動してくれよ。」

「うるせえ！」

ゴメスは金の皿にある残りの果物を、皿ごと勢いよくひっくり返した。果物は床に飛び散り、金の皿は石床にあたりカン高い音を立てた。

コーはその場に呆然と立ちすくんだ。

ルーは素知らぬ顔で近くの壁の絵画を見ている。

「このガリ勉野郎！リーダーに意見するな。」

(だめだ、こいつ。)

コーはもう何も言わなかった。

気まずい沈黙があたりを支配した。

そこへ、アリスとアルがスーを連れてやって来た。

「やっぱり、スーのやつ、隅の方で、出口を探してたぜ。」

アルが報告する。スーはもじもじとして、申し訳なさそうな顔をしている。

「やっぱりね。まあ、よかったんじゃない？みつかった。」

コーが言った。

「ゴメス、元気になったのね。クスリ上手く作れたんだ。すごい！」

アリスがはじけるような声で言った。

「フン。」

ゴメスがそっぽを向いた。

アリスはそんなゴメスの態度をよそに、ルー達にどうやってクスリを作ったのかを聞き、すごいを連発したのだった。